

私は千葉県柏市で生活安全産業の一翼を担うべく、警備会社を展開する会社経営者です。ぜひ、新卒高校生の方々に当社の門をたたいて頂きたく、先生方、学校関係者の皆様に日頃から、経営者として思うこと、感じていることを綴ります。文化・芸能・教育・社会・経済・企業の問題を一緒に考えていきたいです。当紙の題名は私の人生訓であり、モットーでもあります。



キーワードは生産性向上



企業と労働者の関係が50:50(フィフティ・フィフティ)の関係から、ともすれば労働者優位の時代になってきたことを実感するニュースが増えています。給料・休日・労働時間・セクハラといった労務管理の問題は企業リスクのひとつとなりました。

その流れを加速させているのが、政府の進める働き方改革に後押しされた勤労者の権利意識の高まりでしょう。人手不足は賃金上昇を促し、より厳格な労働時間の管理を働き手が主張できる環境になりました。いわゆるサービス残業を「必要悪」とした社会的風潮が戦後70年を過ぎてようやく崩壊してきたのです。

日本の高度成長期を振り返ると、当時のサラリーマンは良く働いていました。外国労働者の雇用を奪ってまで利益を追い求め、「エコノミックアニマル」と批判されようが、「間違っているのは休んでばかりの怠惰な外国人の方」という認識が当たり前でした。

それは決して海外企業よりも生産性が高かったわけではなく、通貨安、低賃金、少ない休日と長時間労働をいとわない労働力によって支えられてきた成果でもあったのです。週休2日が定着し、祝祭日が年間10日以上も設定され外国並みに休暇が取れる労働環境となり、今度は日本人の生産性・競争力低下が心配される逆転現象さえ聞こえてきます。

当社でも従業員一人ひとりに「生産性の向上」にどれだけ関与できるかを問うています。会社への貢献度は、より効率的に最短時間で成果を出す社員に高評価がつくのです。「他人より頑張ったから」「休日返上で残業もいとわない仕事ぶり」だけでは高評価は望めません。そうした変化を受け入れる覚悟が働き方改革の一方で求められていると思うのです。



当社では毎年、たくさんの高卒生を迎え入れております。一人でも多くの若い力を大切に育て上げたい。社会の発展に貢献できる人材に成長させることを私がお約束します。会社を通して彼らの人生形成の役に立ちたいと存じます。

ぜひ大切な生徒様の進路検討に私の会社を加えて下さい。本日は、御精読ありがとうございました。

松本 隆一郎